

もろこしには今宵餅を製して、いろくゝの狀に作り、月餅と號して相をくり、又月餅、西瓜等を食して、看月會をするよし、月令廣義にみへたり。

〔東京夢華錄八〕中秋 中秋節前、諸店皆賣新酒、重新結絡門面、綵樓花頭、畫竿、醉仙錦旆、市人爭飲、至午未間、家々無酒、拽下望子、是時螯蟹新出、石榴榲勃、梨棗栗、萄弄色、棖橘皆新上市、中秋夜、貴家結飾臺榭、民間爭占酒樓、翫月、絲管鼎沸、近內庭、居民夜深遙聞、笙竿之聲、宛若雲外、閭里兒童連宵嬉戲、夜市駢闐、至於通曉。

〔徒然草下〕八月十五日、九月十三日は、婁宿也、此宿清明なる故に、月をもてあそぶに良夜とす。

〔古今要覽稿歲時〕八月十五夜 八月十五夜の月を賞すること、島田忠臣の集にはじめて見えたり、その年記さだかならずといへども、齊衡三年詠史百四十六首を奉り、貞觀元年調三百六十首を奉れるよし、家集の自注に見えれば、その時代大概えられたり、そのうち貞觀六年八月十五日、菅原是善卿後漢書の竟宴せし時、聖廟の作られたる序に、滿月光暉、咸陳中庭之玉帛とあれば、その宴夜に及びしこともえらる。本朝文粹また聖廟の八月十五夜、望月亭にて桂生三五夕といふことを賦させ給ひし時は、紀納言詩の序をかけり、同上大内にて賞し給ひしは、醍醐天皇の延喜九年なり、同上仙洞にて賞し給ひしは、寛平法皇の亭子院にて行はれし時、菅原淳茂の詩序かけるや、同上はじめならん、歌は貫之、躬恒、素性法師などのをはじめともいふべきにや、貫之集、古今六帖林道春は古樂府の婦娥怨を引て、西土にては、漢の代よりもありしにやといひて、されど盛なりしは、李唐の代よりなりと、野槌いへり。

〔雲州消息上〕明月之得名者、八月十五夜也、雖得其名、晴又希有也、今夜銀漢卷翳、金波鋪影、可謂千載一遇、歟、難得易失時也、何可默止乎、寒箔登樓之興、聊欲追前蹤、詩客四五人、俗人兩三輩、不期而來會、是皆當世之好士也、只依遲、尊下之光臨、豫空座右耳、抑恩慶之甚也、忝廻花軒、素懷可足、下若酒、上林